OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポストコミュニティ住民による難民との共生にむけた活動 ： トルコ都市部の現状と課題
Author(s)	藤山, 美律
Citation	平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2019
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　人間科学部　採択番号　No.2

平成３０年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏　　名	ふじやま　みのり 藤山　美律	学部 学科	人間科学部人間科学科	学年	３年
ふりがな 共　同 研究者氏名	はまだ　あかり 濵田　朱莉	学部 学科	外国語学部外国語学科	学年	３年
					年
					年

アドバイザー教員 氏名	澤村　信英	所属	大阪大学人間科学研究科

研究課題名	ホストコミュニティ住民による難民との共生に向けた活動―トルコ都市部の現状と課題―
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）

1. 研究目的

本研究の目的は、世界最大の難民受け入れ国であるトルコのホストコミュニティとしての実態と、難民との共生に向けた取り組みの概要と効果を地域住民の視点から明らかにし、日本での難民との共生のあり方について示唆を得ることである。日本は 2017 年に 20 人の難民認定申請者を認定しており、これは処理数に対して約 0.2%と低い認定率となっている(法務省 2018)。難民認定申請者は増加傾向にあり、今後も継続することが予想される。日本の難民受け入れ数が少ない理由として、日本で難民支援を行う認定 NPO 法人難民支援協会は難民問題への日本社会の関心の低さからくる政治的意思の薄弱さを指摘している（難民支援協会 2017)。難民受け入れを政策レベルで拡大する際だけでなく実際に難民を地域に受け入れる際においても、ホストコミュニティ住民たる各人が難民問題を自分事と捉え、一定の理解を示すことが求められている。

以上のような国内外の潮流を汲み取り、次年度以降の難民認定申請者及び難民受け入れ数の増加を想定し、日本社会で難民を受け入れるべく地域住民レベルで難民を迎える準備をすることが必要である。これにあたり、世界で最も多く難民を受け入れているトルコのホストコミュニティで発生している難民の包摂と排除の事例、またそれに繋がるホストコミュニティ住民の難民に対する感情を読み解くことが日本の難民受け入れを考える一助となる。

2. 研究背景

2011 年のシリア内戦発生以降、2017 年までに 560 万人を超えるシリア人がシリア国外に避難している。トルコは世界最大のシリア難民受入国であり、約 8000 万の人口に対し約 360 万人のシリア難民を受け入れている(UNHCR 2018)。シリア難民の人口はシリアと国境を接する南東部だけでなく、ヨーロッパに近く経済活動の活発なイスタンブルやイズミールにも集中している(T.C. Icisleri Bakanligi Goc Idaresi Genel Mudurugu 2018)。シリア難民の大量流入及びトルコ滞在の長期化を受け、トルコ国内ではシリア難民とトルコ人間の衝突の増加が報告されている(International Crisis Group 2018)。同時に学校・民間団体等によって特に子どものシリア難民の社会統合に向けた試みが

複数存在する(Hürriyet 2018)。トルコ人のシリア難民に対する国民感情については Altiok と Tosun(2018)がアンケート調査を基に詳細な分析を行い、歓待と敵意が混在していると述べている(Altiok, Tosun 2018)。しかし多くのデータが量的なものに留まり、ホストコミュニティ住民の日常生活から滲み出る言葉や行動を通してシリア難民への感情を読み取ろうとした質的研究は少ない。また国際 NGO によるトルコにおけるシリア難民支援の報告は確認されるものの(WAHA 2017)、トルコ人市民団体による難民支援の例やその実態を調査した研究も不足している。

3. 調査方法

本研究ではイスタンブルとイズミールの 2 都市を拠点とし、シリア難民や難民支援に対する意見についてトルコ人に聞き取り調査を行った。イスタンブルでは調査者(濵田)の通うボアジチ大学(Bogazici Universitesi)を中心に、10 月 1 日から 11 月 25 日にかけてイスタンブル県内の大学に通うトルコ人学生 5 名およびイスタンブル県カドゥキョイに住むトルコ人 3 名に調査を実施した。イズミールでは 9 月 20 日から 10 月 1 日にかけ、県内の町であるトルバル、テペキョイ及びバイラクルに住むトルコ人 6 名にシリア難民に対する意識の聞き取り調査を実施したほか、県中心部のコナックで難民支援活動を行う市民団体 Izmir Muzisyenler Dernegi を訪問し、参与観察と主催者への非構造化インタビューを行った。さらにフィールドワークで得られた情報を活動報告書にまとめ日本で難民支援活動を行う 2 つの NGO に送付し、日本で受け入れる際にトルコの事例から参考にできること、そして参考にする上で注意すべきことを中心にフィードバックを得た。

4. 調査結果

4.1 トルコのホストコミュニティとしての実態

イスタンブルの事例

イスタンブルはトルコ最大の都市であり、同時に約 1,503 万の人口のうち主に職を求めてやってきたシリア難民が約 56 万人暮らすトルコ最大の難民受け入れ都市でもある (MMP 2017)。聞き取りを行ったトルコ人大学生 5 名は総じてシリア難民問題を深刻なものとして捉え、4 名がシリア難民に対して良い印象を持っていなかった。その理由として難民の数が多すぎること、子どもを児童労働に追い込む・トルコ文化にそぐわない行動をとる・トルコに来てしばらくしてからもトルコ文化になじもうとしない、といった行動を見聞きしたからと回答した。またカドゥキョイに住む 2 つのトルコ人家族にシリア難民問題について聞くと、15 歳高校生の H は、エルドアン大統領の難民政策が対外的な評価ばかり気にかけた内実の伴わないものと指摘した。また行政機関に勤めた経験のある G は、シリア難民の子どもにトルコの教育を受けさせトルコ社会に統合させることの重要性を訴えた。

イズミールの事例

イズミールはトルコ第 3 の都市であり、約 428 万の人口のうち約 14 万人のシリア難民が暮らしている。エーゲ海に面するという地理的条件から、難民流入のピーク期には海路ヨーロッパに渡るため多数のシリア人が集結した (BBC News 2015)。調査者がシリア難民の話題を出すと、調査対象者のトルコ人たちは一様に顔を曇らせた。まず一般的なシリア難民について、彼らは「シリア人はトルコ人から家と仕事を奪った」、「シリア人は金を盗む」、「数が多すぎる」と総じてシリア人やシリア難民に良い印象を抱いていなかった。しかし直接会話したことのあるシリア難民に対しては、「良い人たちだ。トルコを好きだと言っていた」と好印象であった。この意見を述べた 63 歳男性 A とその妻 B は当初シリア人と交流することを忌避していたが、調査者と一緒に先述したシリア難民家族のインタビューに参加し彼らから「トルコが好きだ」という言葉を聞くと、彼らに自ら笑顔で話しかけ別れ際に

は握手を交わすなど態度を一変させた。また難民問題を政策と関連させ、「エルドアンは難民に金を与えたが、自分の国の人々には何もしない」、「シリア人にも投票権があるからエルドアンが君臨し続ける」とエルドアン政権への批判に繋げる傾向が見られた。

4.2 難民との共生に向けた取り組みの概要と効果

イズミール市の中心部であるコナック(Konak)に事務所を構え、2013年から寄付を基に難民支援活動を行うIzmir Muzisyenler Dernegi(イズミール音楽家協会、以下I.M.D)は難民にセラピーとして音楽に触れる機会を提供しており、ワークショップや楽器教室等を事務所で定期的に開催している。難民に限らず社会的弱者に関する記念日には路上演奏会を行うなど、事務所外でも活発に活動している。SNSを通じて情報を発信し、Facebookのグループには3000人以上が登録するなどインターネット上で人脈を維持している。さらに難民支援を行う他団体と積極的に連携し、共同でイベントやプロジェクトを行っている。活動日毎に多様な社会的背景を持った新しい参加者が事務所を訪れる。

I.M.D主催者の女性は、難民の啓発活動をトルコで行うことは非常に難しいとしつつ、トルコ社会に流れるシリア人への嫌悪感は政治的なもので、自分はただ目の前の困っている人を助けたいだけであると述べた。イズミールの中心であるコナックでもシリア難民に対する嫌悪感は根強く、活動のことをこころよく思わない人も多数いるという。

調査者がI.M.Dを訪問したのは週1回の楽器教室の開催日であり、10代～60代、男性9名女性5名の計14名が参加していた。シリア人男性1名の他は全てトルコ人で、使用言語はトルコ語を中心に一部英語、アラビア語であった。楽曲演奏・英会話・文化紹介を通して多様な社会的背景を持つ人々がコミュニケーションを図り、文化を共有し、精神的な安らぎを得ることを狙いとしていた。

またトルコにおいて難民を支援するアクターは行政や市民団体だけでなく、個人も重要な役割を担っていることが分かった。イズミール県郊外のテペキョイ在住の小売業を営む男性Eは、イスラム教の六信五行のうち喜捨としてシリア人の知り合いに金や食糧を不定期に提供するという個人的な支援を行っている。自身の営む小売店にやってきたシリア人や、トルコ人友人の知り合いのシリア人に食べ物を渡したのがはじまりだという。

前出のAは筆者と共にI.M.Dの活動に参加した後、I.M.Dの主催者をコミュニストと表現した。また音楽演奏は難民支援にならないとI.M.Dの活動内容を批判し、「(団体主催者が)シリア人や障害者だけが好きで、エルドアンやトルコ政府、トルコ人、トルコのことは嫌っているんだ」と難民支援をトルコ対シリアの構図に結び付けた。しかし個人的に難民支援を行うEに対しては、「困っている人を助けるのはとても良いことだ」と理解を示した。このように難民支援者は難民支援活動自体ではなく、その手段や政治思想によっては不快感を持たれる可能性がある。

4.3 NGO団体からのフィードバック

フィールドワークによって得られたトルコの特徴を日本と比較したとき、難民が受入国に好意的な姿勢を示すことで受入国民の態度が軟化するという点については日本も同様であると、日本に居住する難民の支援を行うNGO職員Iは指摘する。またトルコ人の個人に対する寛容さを日本人は持ち合わせていないと、日本で難民問題の啓発活動を行うNGO職員Jは分析する。Jによれば日本人には言語が違う相手とのコミュニケーションを全くとろうとしないという傾向があり、身振り手振りで相手に自分の考えを表現しようとする積極性に欠ける。さらに社会の中に難民と地元民が互いの文化を共有する場や機会がないため、相互理解が進みにくいという。

5. 考察とまとめ

調査結果から、トルコのホストコミュニティとしての実態に迫る以下の3点の特徴を見出すことができる。①一般的な風潮としてトルコ人はシリア難民を歓迎しておらず、特に難民の数が多すぎることに嫌悪感を強めている。②この嫌悪感は現行の難民政策を推し進めたエルドアン大統領への精神的反発に繋がっている。③しかしトルコに好意的な意見を持つ個人に対しては友好的にふるまうことがある。**このようにトルコ社会には、Altiok と Tosun(2018)が指摘した通りシリア難民に対する嫌悪感と歓待が混在しており、シリア難民という集団か個人か、もしくはトルコに対して好意的かそうでないかで態度が大きく変化する。**

難民との共生に向けた取り組みについては、市民団体によるものと個人によるものの2種類が存在することが明らかになった。**市民団体による難民支援活動の概要としては、音楽というソフト面から難民の心理的サポートを行う団体が存在し、地域住民から必ずしも理解を得られているわけではないものの、主に SNS を通して関心を持つ層と繋がり参加者と寄付を集めている。**市民団体の活動に対する地域住民の反応としては、苦境に立たされている人を救うという本質そのものは否定しない一方、音楽セラピー等の心理的サポートの必要性を感じていない場合がある。また I.M.D には多様な人々が興味を持ち活動に関わっているが、参加者を繋ぐものが音楽であることから音楽家らが遠方からも集結する傾向にあり、地元のトルコ人参加者を多数獲得できているわけではないと推察される。

また個人による難民支援の存在から、**イスラム教という宗教的動機によって市民団体の枠組みに頼らない支援が地域の中で機能している**ことが分かる。さらにシリア難民がトルコ語に堪能でなくとも地域住民とネットワークを構築していることも考慮すると、トルコの宗教と国民性からくる寛容さがシリア難民を惹きつける特徴の一つと言うことができる。

以上のトルコの現状から、日本が難民を大規模に受け入れる際の教訓として以下の2点を見出すことができる。**①難民自身が受入先の文化に馴染む努力をするだけでなく、受入国の社会に好意的な姿勢と適応しようとする意思を示すことで受入国民との交流が生まれ、難民の孤立を防ぐことができる。**②言語文化の異なる外国人との意思疎通を避ける日本人の傾向によって、トルコでは難民支援の重要な一部となっていた個人的な支援が日本社会では生まれにくくなっている。それを補完するには**個人に寄り添いながら地域住民と難民の橋渡しをするアクターが必要であり、この役割を担う団体の存在が重要となる。**受入国には難民にその土地の言語文化を丁寧に共有し、ホストコミュニティ住民と難民が友好的に交流できる場を設けることが求められている。

参考文献

難民支援協会（2017）「日本の難民認定はなぜ少ないか？－制度面の課題から」https://www.refugee.or.jp/jar/report/2017/06/09-0001.shtml (2018/12/05 閲覧)

法務省（2018）「平成２９年における難民認定者数等について（速報値）」http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri03_00700.html （2018/12/05 閲覧）

Altiok, Birce and Tosun, Salih (2018) "*How to Co-exist? Urban Refugees in Turkey: Prospects and Challenges*" UNESCO Chair on International Migration, Yasar University

BBC News (2015/08/13) "Syrian refugees in Turkey: "Nothing for us here"" https://www.bbc.com/news/av/world-europe-33901948/syrian-refugees-in-turkey-nothing-for-us-here (2018/11/30 閲覧)

Hürriyet (2018/04/25) "Türk ve Suriyeli çocukların şenlik coşkusu" http://www.hurriyet.com.tr/turk-ve-suriyeli-cocuklarin-senlik-coskusu-40816431 (2018/08/25 閲覧)

International Crisis Group (2018) "Turkey's Syrian Refugees: Defusing Metropolitan Tensions" *Europe Report* No.248 https://d2071andvip0wj.cloudfront.net/248-turkey-s-syrian-refugees.pdf

MMP (Mixed Migration Platform) (2017) "Refugee, Asylum-Seeker and Migrant Perceptions in Istanbul, Turkey"
http://groundtruthsolutions.org/wp-content/uploads/2017/06/MMP_Turkey_R1_Istanbul.pdf (2018/11/30 閲覧)

Presidency of The Republic of Turkey (2018) "Refugee numbers and their lives in Turkey"
https://www.tccb.gov.tr/en/activities/refugeenumbers/ (2018/12/05 閲覧)

T.C. Icisleri Bakanligi Goc Idaresi Genel Mudurugu (Republic of Turkey Ministry of Interior Directorate General of Migration Management) (2018) "Temporary Protection"
http://www.goc.gov.tr/icerik6/temporary-protection_915_1024_4748_icerik (2018/12/05 閲覧)

UNHCR (2018) Operational Portal Refugee Response
https://data2.unhcr.org/en/situations/syria/location/113 (2018/10/30 閲覧)

WAHA (Women and Health Alliance International) (2018) "Turkey"
https://waha-international.org/countries/turkey/ (2018/10/30 閲覧)

附属資料

表1　イスタンブルにおける調査対象者

	町	年齢	性別	属性	シリア難民との関わり
A	エユップ	20	女	マルマラ大学学生	母からシリア人の話を聞く。自身の交流はないが日常生活の中でシリア人の姿を見る。
B	ウスキュダル	24	男	イスタンブル大学学生	直接的な関わりはない。ニュースなどのメディアでシリア難民について知る。
C	アリベイキョイ	23	女	ボアジチ大学学生	ボランティア活動で同じく活動に参加していたシリア人と知り合う。しかしその後の交流はなく、活動でも少し話した程度。
D	ベシクタシュ	22	女		直接的関わりはなく、ニュースや道でシリア人について見聞きする。
E		20代	女		実家でシリア人を支援、ボランティアの経験がある。
F		19	女		日常でシリア人との交流はなく、大学でもシリア人を見かけたことはない。
G	カドゥキョイ	中年	男	Fの父	住んでいるマンションにシリア人はおらず、町で見かける以外に接触はない。
H		15	女	高校生	F, Gと同じマンションに住んでいる。通学している高校にシリア人はいない。

表2　イズミールにおける調査対象者

	町	年齢	性別	属性	シリア難民との関わり
A	テペキョイ	63	男	イズミール県テペキョイに住む一般のトルコ人	隣の区画にシリア難民家族が住んでいるものの交流は皆無。
B		62	女	Aの妻	
C	コナック	中年	女	難民支援団体I.M.D主催者	難民支援活動を行う団体の主催者として、団体を訪れるシリア難民と日常的に交流。
D		中年	男	難民支援団体I.M.D主催者	
E	トルバル	中年	男	Aの友人 小売店店主	2016年から個人的にシリア人に金銭・食糧を与える活動を行っている。
F	バイラクル	20	女	大学生	町で見かける程度で接触はほとんどない。